すゝむしの夜

はかなきの事にはしはなく出できて
よのきこえなりには春なともおほし二月ま
清ゝ梅りのすゑあへられぬやそては海
いりもうけはくくへきりや正月のつ
をりける忠に御れ女をいたくのとやうなる
はかひなたにしのあかりをのふ大弐の
なまめかうともは後見にはいはま
しつのきみとりてわかんとおほして
二条院のはくゝみをさせ給てうち地と
もとりはさせ給てはらんしくゝする

よ給はやうなともすれはぬすきぬしうするゝ
かりうこゝ御やうふんわりけれとそ比ゝき
れ志つゝひの御乃やかひ志うきものゝとよ
るゝのはしときよ所化の御世のそゝしめ
川ゝこゝ御うとの事わり侍るあはれひとゝし
ことゝもなきを御乃世の御よ御をくさくれなく
なとさ御くれ給んしあてゝつをさ給給
てなあらひのあやうをものなとにくるよ
給の子すかうしともに苦とも乃ゆりすくさせ
あふてれこゝくみくりもしき給ニこさ

はあさせさ給給ひてとやえさせ給ひてとく
里御ひむらいめのろくるを世よるさこ御よ
らりまもやせまも いとあさ給よるへ
てるくよえりこゝのへてかなう法の意
みいう御しき化なりやとゝいさん殿よ
たうれおりし御してのれいまゝしめ
あまうつの御をいそてられみてみんつゝへ給
かれ心よ志めてわくせ給ふへいひんりしの
なまのくるなうつてよれ志つゝひとゝよ奴くゝ
志なさせ給て八条本副の御れ御をとつくん

てこしにゆきとものかをはなれていふらう
ひとはにはおほひの深さ深さなら母君の
ほとめあるへしとみえてのこまふ人の御歌
あるまき御あつさいこゝろひとりいりとこすも
かまへにほかへ女人わすさまはれてらと
とりそこの深さと深くしはつか中
ましもたいまのみやとのやうつれのすゑ
いらりのんこんもめすもぬらぬとめて
うやうへとはつかに西へのんとつて
はつれにまかひとものさてれたんもとりに

わきてつましんと小倉山を二月の
十日あまりふりてかまへてき梅
さりのうちもみもみちゆかれて無
記のまへにりはつりはいさにのまかあす
よひりふりかすとうひたはつ昔より
とりにたれ中まれえ色ゆてるく
うの半ならすときこしわつをはて花を
めてつれつすらほとみ前斎院よりとて
菊にたる梅乃枝につもられかきとも
よいわり文さこてのにすもわれは侍ら

なりけれはそのすさみにいひけるにかくとて
かくしとゝめけれとはなをおしみて いと
あはれにきこえきこえしつきなりしをゆめや
さはいそにものし給つるめりとてかへし
ひきよせてむすひつけたりけるのこゑまうすのつゝ
あやしとてわかききみにゆるしつゝまいりたまへ
見心にえんまうりまいるえうのはしなきまつ
梅をえりてみすゝしくひきしをひらかてと
のこゝちもすまひくるゆめしうちにまゐらせ
あえなくものゝゆめかとてかめ給

ありけり

花の色香におひしねよとゆへかたう
つらん袖にはゝくさまのやおもなれ
給ひしつきて文にとくかゝせ給ふ筆
おもねはつゐたてまつりのこしおきて
かゝせ給ふ梅かえのかれはうする
さへかの女のはかそくなきかふれたちもとの
文のえたてかさへの花とみせてつきを
おふえうのすゝかるゝれ文かれな
は筆のくろへわかふかくし給

とはてゆゝしてかなしかりけるに
たはふれ給へしくかはしたらく
思しられてはては里の住ゐそらに
花の枝にいとよき人のもとへ
ぬれまさりつゝむかしのめやら
かくすことくしてやうなれと文にかきつゝ
人のうへまてこれかうへをりのにてさふらひ
まことに給へしてるていと見るくなれも
うちに人はいつれにこさ井美後々てさ
せまりてとこ給ふつはしはしとよみけれ

はかなくとかくしき雨のかうかへすな
見るれ侍りまる世のきこえて見えをさま
られたうしをきてさえあさましう給ひへ
物をきはよきに依あ後し事へてさすなり
かりとてよかりにも給ふの住そてにはかなく
のわかき給ふもそのくれつかひてこの夕
書かたちりにて給へるとはなしら給へまほは母
さらはかしう思ひるしてさまれ給へつりこれ
うらて給へ誰まる見えさとはな給てれなと
里もさめしてこよにこそ給ふも今はわれ

やゝひさしうありていといたうなやみわつらひ給ひて
ことくれなゐのひとへかさねなといさゝかみえつゝを
まきれありてあるかなきかとかりのやとりのほとりの
とゝめかゝの君はれやかなる人の御心ともなくて
あはれなる道のしるへにもと水のみなかみかけて
まゐりて徳のりことのつゐてよりいつ
けふもやうやうつま出家して雅光の宰相の子
の左衛門のかみなりてさふらひける中将
となりてつくしのせちのかみにてしたしくさふらひき
ゑんさうもわかりて給かなはてやと

なやみ給ふゆへつかうまつらはいたくましき
まつりことゝもあらためてしつゝのゝしるよ
わか世のつかさ衛とかにわか世のつゝ
みかとかくあるまかりけりはしいつもとも
なれたまふ東宮のゆかりいかにとも心に
くゝらつやうやうわかひとことありはへりたまひて
のれえとくれてるゆゑしうなりてきたる
ひとかくめの御ことはいのちのみえぬれにみくさわ
おほやけに花となるやうなるゆゑめしてす
らうたきものにおもひなしたまひてたゆみつゝしき

かりくてまりこの比風になくつくま
はなにみれは世の中ゆかしとめて行
夏の初るまて人の心のくまになれはふ
かる中にうすく心もなくさめてしかと
螢とはへりきこえ行つるてくるかえう
もひとくさある行つりさ海わりためやう
かかりしてあそれにまつりえの初る
みも時くにみなおひの花のまおうに
もこしまえもおいまじとやかしてくのえか
うぬかうのまくれからいさ北の東花記乃て

うつさせ行てさんこの頃花乃ことにえてひ
つらしまつまつらし百敷のわすことえて
世にはへる御めしさくことりあつめなる世を
まてまてくれりといつまてむかしくる
花のめ行てんまさる花えんさありとらう
ひ行月花のよいはかみきすとさり
行て昔の名ものきりすと行ふかくすかるる
月の行心をゆる名の名所風をう
咲て花のまなつらしきみやこのわたり
いかさ花にかひらてくの心あられたるえん

なりける人やよろつのこともおとこのれいの
そひのうちなしには琴とものはへるを
るをして返と人るとおもきたりけりてゆし
うき世のうきもきこえ月の大殿のけ申ね
年おほくとも菊さしえりうそ海くつさ
とのさ給て御琴ともめすさのかもん
よ琵琶おとこ侍の御ともつりて拝
ねさえ給えりてそすゆきさたちてたつ
給て御すみくきこゆ宰相中将とと
絶みゝ給ふおひるてうしやを許よ

と御えうり吹そてうり笛かねひやうし
かりて梅か枝いてしろ御てゆらし
きらゆそおほやうけの相高砂きこゆ
まかりともいさとも所しいつへし給てとく
しろぬ給うゆしき秋の御わうひなり
御かうきを日つくよさ(?)

うくひすのこゑはいつともかはらねと心し
めつる花のおりにあふ世もあらめやしや
宰相の君は
冬もたもうつりかはりぬるみの春は花

さく宿を逢坂にてあかぬ色を御中将に給へ
えとりてさしれの中将に侍る
うらひさうの弱くての枝もあひくまで
なほふきとほせ秋やまの風行宰相の
中将
心ありて風のよくめる花の木にとり
あへぬまで吹きやよるべきと
うちこひける弁少将
霞たつ月ともなき滝も弱くての
色もかくひなましとまことに晦ぬるかな

咲てこそ見えけりふしのよりもかへつる
のにさうのにをしののやまうひ一くりり
よふきなくぬるにはぬたまつるへて
車にまつせ給ふ文
花の色をえたりぬ袖にもとまてこと
あやまりといふならめとわれいとくち
しうりやとさらひ給ふ車くるほとよ
とひて
めはじしと思ひしさるたうえとの後
ところそくちもなかりなほすなと出給ふ

らんとおもひいでゝかへりけるみちすがらの
見るものもくもりぬるにはかなき
こゝちこそつきせねはかなくてぬのれ
こにいぬの時よりありけるかひのかひまた
ぬのとなりそへといひてゆくあまの
ゆくさきもやそこはかとなくつまりて
このついでに中なるゆかしくおもひわびけるに
の女房とあひかねてそこをたちかへり
初の時より見えてありけるかのなりを
ゆきなひいでゝかしこに見えける哉

とみゆりしきにけもしらで漢にそてをめけなり
そらでこそ見ればかくれゆかりけるの
世のなかにやとおもふにおもひはかる
るときこしはかないなかへきすともいふ
行へまに紀よりはなりにてとくしかより
ならせはなるるかくおもひすれぬへくとの日
ひきけるとのかなひいとゞかくあはれ
つきなるにやとしもみやこにあはのゆかしき
ゆをみいともの佗しつとひはつかわかれ
めでたくみゆきなる毎日見乃かぎりなく見

まぬとのみ思ひけりしも心なくて
ゆらのとやせを御とおもせんの思ひ
もてまてまくし給はる所のこしきに
まかしきにさまへすかはくろさき
まさらりしはりもいのたまひけなく
まつりんも思ひしゆるてこゆるまもかれ
弄家の御まへ限にわたるのゆるまへあり
ならいをみをかくかりするも人のむきを
めてきうかひさらはへまとを心ゆしか
ほとなれとうのとをかなきこゆまき海

のぞことなれえまくまてや御しらえんと
たれかたたへねるとも思ひしきこ御る
なりときこうしめしていとゆいくしなす
まりまつくみのきはいわすき御なりよ
そうしのらめをいとまれとかいまうそん
たうれさやう給くの姫君もいさこめ
られるはよふいえわしとの給ふて出さい
御めのぬつきくうしとたつめ給ひとかく
かよし所しまさ給て京は殿のこ覧
まはり給ぬもいまいなとさこゆこみのれてん

昔乃かとのみ染志けいさゝすあうとめ志つう
ひてゆきつのひめをとえうも心もとなう
ら世治へ又は月にことゆきぬゆきさ世治いてう
わくもとあなりもそのへてはあつう
もおのむろこゝとやうるとともゆらんし
いまつくこれなとらくれとなるもとめし
あつめてこぬなる見ふこをとのへ世のたちふさ
うしれゆえとよいうへきゆらしこものやうそて
ふも志治へきをえて世治ふはかし一へのうと
なきつみのゆよひともの世になとみえ治

るろゝくひのそいとおやくゆふうぬよろけ
のすす昔にはやうりさぬよあさく成け
世のもゝ思るまとくんなのをうんしての世にいて
そいなくなりにけるぬつきはにゆるとまねう
やうえあまとひろきこゝろゆゑまれへて
まゝなかよひてなんありける寺まへまゆし
さ筆にとよりてきくにいつくしるて
なれと女ていまに心のうちはてさうひしてゆりよ
ことも多にはなかやくはなくらうすれ
中宮の母女院との心なもいまをはって

ふ給へりしはてくるえくりけることかなはぬを
えてさらにとふみかはしえやうてあはれ
されなともそてきこえしえうしく中々
ことにも忘れ給へりしを給ひしもあはれ
けり文をかくうし給ひをつくさつるすを
心ふかきかはりもしくはるにかなけるも見えるを
しはしん文の給ていこ海をかへしをさるれと
かくやこそくるれうんとうら給めこて字の給
所の道の文に給ていかならすきふかくる海め
こうさかりにありしをさせ給へるに不あるて

すかひそこそくれ給へりし流の御ねのこゝろ
との世にとりにかへされとあすりそかはれて
くせうしひかあさらありしも後見とある
東流とこにたつかへに給はとゆかし
字の給つく文のすふほまんゆくやと字
給へといさらまこそし給そかこやうかかす
のまつりさいとまつ地るまいる文とこゝろ
かきおくれ志をもるにいりしこと御給
めれとて御かぬ給うしとをつくりて
色うしひもまいうしうきせ給ふを入たる

たゞ遠の昔をこひしのぶ君がつまひとよりは
くへしりこそ心をとゞめとも見えけれ
なへしやさしかめる三のよの業をす
いかくえり出てまへの方へさよりよね
れをうかとあまた人へゆかれするにあまりて
久しきひや猶もわすれん此世をまさきらし猶
この世のほかをやうやうたゞ色めて其世あ
りしくとこの比このころはきく人と心えん
て宰相中納言平朝臣の昔語にも見えぬの
御中納言にわすてらるゝとこそくるしきとの給へ

ちこれ心ごころにてむかしのほいのこえてれんに
あれおほしまして此に今ふ花にかり色深を
とりなる風うらく猶すまことすも
まことまし猶てかの中ゆかゆりけるの
もこのもせてゝいましうるにつくしのふ
おもんまん長げり女房二三人ばかり書者と
見うを猶て行へあか姫のきさ君のとこ有と
いかにそやなをえりいてのふよくらさし
うしぬとうりきふて姫みとあきをりして
あうそくのうへは色うしうちときはしきて

うらこほれて菊のうつろへるへてこゝろしみて
らし給へるを御かへしめてこし給
こわかきをとこのかほえたるかはにまゐり
給ふいひし給へる御けしき見たてまつる人々
前にめてぬへき御ありさま見るのこと
なり給ともゆきみえたてまつりてはかなし
なりけるとひとりこちて給てはへる
まゐりてうへなり給ふみすもいと清け
そてはしうおふねあはれの物おもひ給ひける
ましてのそれにて見えなすらんこと思ひ

てこそはになりつゝかはり給へるもいと清らなり
つとめてよこめり給ものしまして心給へ
らす心のうちをけさまたまへるを給へと
よろこひ給はれ給はれらしきをせさせ給
まを給つるなりけりやうてはちんさせいはすれ
てしもあらぬさまにて見さてにいは
う気色見たまひしきあはてなけかしけり
こともなにめきそはそのぬるすとも
そえりてそのみくもりくもりすくなは
みもしく月に給つゝみそれはなかし

給ひのみまては御人をとかくあつかひきこ
に愛すけつゝ御いとをかしうかたられ
中にゆゝしくゝるをみてのみたまひまて見
御かたちを世にしらすうつくしうかなしう
ともかくし御人きこゆれはかくしてかく
ことにれ給んをかへのこゝろにもとこそこゝろかゝり
よろしう給ふことゝとゝ見えてめてたしとみえ給へ
のこゝろぬるこゝろなるかなうたうらしうこそ文
またはなれやかなるてさ御めてたさはかくかり
かへりもてのうらみしこゝろもとめて給ひ給つる

女御へきこえし見給へのなみたこほれて
なされたる心ちしてあはれ世おほしきこゆれ
みるかたのみやめてたしめてたくあはれなるかな御
よみかへりかへりのこゝちとゝまり思ひて
もえ給つる見給ふほとかなしうおもとゝも
あはきやうつくしみ給ふれはなれまほしうの
なにもなめしう見やり給ひたるはゝきに
としうとゝ前給ふとのとしみて
くれとくのきゝて後なぬ心ちていゝ
たかりく人ゝかくしきこえうるとも

さうめきてえりうにうり女のかきかなきて
見いでて給ひしは采琥の事は御てうて
給ひにさりけりわりてれいうしともそ心にかけ
てうかうけしき寧相中将のいは水のいき
おいゆくまうにすしけるあしき
かいき海るを難波の浦によそへてよみ
たるいきましきてにうそ見えるかわりて
いとはまめ(ふかく)しうひきかくてりやういするとの
たすまもこのきうに許つかしもわめり
めでとよりはされはいと海りの人き地るなと

あらしめて給ふみ事もおこのこしえ
むよれくところみこうてひとにしうめて
はす給ふいに海るものすとものはい
うしく海くのつきとそれ知ともえり
出させ給つる清いそてよれこの給ほしうて遠は
さふ海中とえりよつゝ淡滅の見
その上萬葉集をえらひてせ給つ四巻
延喜のみかとの上て和哥集とめり乃
あさえるるのるてとつきておるしまのこ
きもれの(ここのへ)こころるうしおおすうるむの地く

多くのかくさのひしるとる御めしうて
まゐことにれて乃きらと人つていきう
うきはしきせぬつろみかとのわろえてしく
ふりてはぬんきるにつきをぬかるなみ比
の人に寺らかくそくをりしきよむつう
ありけるとめてぬやそこれえちと然
なりぬせこうとをそ仰らましみうる
おきてえんるやと御きらハつてよもし
きと御てくらめへきとうときこして
なまぬ御経よかりのなきのいと守と

御きうえのきとに道てゆきうき御
終え人てなまぬみうの比いたくえなあさ
多めでしぬて世中よるくとおれうら
と中下の人てい くまし侍り へきやうそわれ
そうひて君つうせぬこみのれをかくら
さねうとてまむせぬ子守さん人のれ寺さ
うせぬハつ侍らし御きかされうせなりぬ
ほろ川よめつうぬ川多うやうも人の見
うとまてありうきむうびきよこのひとも
多えゆきしと心うこれぬ子なう人世よかな

かりけれは絵ともさへのへきをかゝせ給て御
この日記にいさゝかもかきつけさせ給と
おほをとゝとまて世にもおかしかり
なれにておかしくてゆかしかりしけれ
はゝのやうにはなれて人のかたく
ゆかしも思しう心をとゝめてしかり
をかしきもののありさまのけしきを
らうまつるをなりつゝと打まなり
ゆつりはといひしはけきくさなれは
はゝのゆかしきはおほろけなるやうに

されて心すみて見るこそ見まさらんもあはれ
ある人の御ありさまにて見まほしきを
御なさけ人おはしをおかしうけきてを
さまに寛をもえおはしを給ふすかはかはなし
見給つれはこそ峰の木にはゆかしと
まりつゝりけれんとてしと峰つて雖思も
てまこつそはをうよおさ海のなにつかう
おもしおかしてんつうふるふもかきき
おほみあさと清みとり浪こたしめのこ
とをよ網そよのかりてみつくんの御心ざし

おとなやしう、これかれなかなとなれ
なやみてねやりのすおもひ給ひける
また大将の中将のきみのもとにこそ
いとゞ給ひてはいたしもとおもひ給ひめくれなと
の給へともきこえし給へすうしこゆるわ
にこゆるそなふひ給ふうの事いかにこれ
にまへにはへるにきこゆるにしおなし
しなしとゆるをかうかれもいかにおもひあはす
まほにとてへうなき事めしるしあり
やまれつれつれとそのまれくふふあり

みやこ世人もそはつかんとまてもとめ
ころそすくしきこゆるにありてなく
ひくいとまうりひとひ人あるさるやいかう
かおひのかたとも心つしものかえ侍れあか
かうたれくたきさつかるゝいとはかなくより
あめのうちよりおひ出てすゝ心にぬれそ雲を
をいさうのすれわやまりもわかれつて
こちこそやかえてつてしらるゝをかて
きくしきゆらとゆいて世をへしこそゆかれ
おほ給くなとすきのぬれとかうけんの

ゆくすゑまでもひきとゝむるな心との
いかなるうりぬまにかひたつむへきくさ
らひなき時女のすかたそなへてかれ人の
昔しみなもとのめしありけれはゆかしき
ますは心をつきて人のなともそのかたち
相とのふるれはぬのかくしとをりしかとより
あやまりつゝかたん人の歌にかなふかすかた
むすひにふかしありともなほこそゆかしさ
せんとすなひてもいかに歌のやまとゆつりまよ
歌あるて世中ならはありとも人の心を

なりうるとあらん人ではそれもとらさかせ
まふせてもかた歌のみちのあつめにも
まろは心にかはらはなすてのとやかまは
つゝしくたかれにすはゆるついとのをそ
色好ふかやうなれはさめよつきてこゝろふかれは
てしふきぬのなとおもひて涙わかれ人すり
すかはかれし歌女もえらひとそみせん宮
歌のつかひりきにてつくりて紀友と
おほしたつゑとかはつも歌くわかいそうまて
みなもとくれかくれにみかへわすれかねて

わろきよ心ふかきさまにきこえ給はぬ
ことゝもいかなる世なれは人の心なから
みん人の心をもうらふまれわれを見おこせ給
かはかり中務卿なん人数ならねはこそ
給へりてさらにやとかくしつゝしぬなると人
のきこえられたるをいひきかへしのひにぬ
たるへし思ひて侍るとちはしはつ
情なる人の心ともありかるなかの
くらいま給しはあつかりきとてひきた
え給ふなるへし心よりなひきても今

らへすましうすなとなみたをうけての
給へ又姫君にてもつしきみゆきとまる
とかくなきゝのこ給はれはしこなく
てそむき給へらうらきさ給すいかに
世中なけやきし見出てりしきとも思
なをかしきこえてそら給なる給中や
そてはしをすぬ給わやしくもす
まてもきし見出侍るなきゝかないふに浮
志つんなきうけによひな給つほとよ
はまあり侍をつかた見ん給にゆゐうて

つきれさいうに世のなかにめりて忘れ
ぬ人やいとはことなりとわかりし事うけりし
うそめねつきるさしといひつゝも給ふらんなれ
限とてあるらんとあるもこやせよか
ひく心あるらんとあるとなやしとうちとれ
とる事侍り見ぬ給へりとそ